

氏名	郭 艶 春 <small>クォー イェン シュン</small>
学位(専攻分野)	博士 (人間・環境学)
学位記番号	人博第63号
学位授与の日付	平成11年3月23日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 文化・地域環境学専攻
学位論文題目	雲南における少数民族の環境文化に関する研究 — 人と森林との関係を中心に —

(主査)

論文調査委員 教授 古川久雄 教授 山田 勇 教授 市川光雄

論 文 内 容 の 要 旨

本論文は、森林消失の著しい中国の他地域に比して、今も相対的に豊かな緑に恵まれた雲南西部を対象に、今日まで森林が保全されてきた要因を生態史の観点から臨地調査によって追求したものである。対象地域は寒温帯チベット高原区から亜熱帯多雨林西双版纳地区まで多様な生態系にわたり、その生態環境の上に多数の少数民族が棲み分けている。本論文はこうした多様な現実を分析した上で、森林の利用と保全を両立させる少数民族の生活を「環境文化」という切り口から分析したものである。

論文は3編8章で構成される。序章、1章、2章で問題意識、雲南の自然と森林概況、雲南の少数民族遷移史概況を述べ、先行研究に対する立論の根拠を明らかにした後、3つの地域における臨地調査の結果と考察を3編5章で展開する。「雲南西南部編：西双版纳州における傣族の人と森」、「雲南西中部編：保山地区における多民族村の人と森」、「雲南西北部編：迪慶州における蔵族の人と森」である。

傣族は雲南の山地、高原に刻まれた盆地に集住し、盆地底の水田耕作と低山地の保全的利用に長けている。論文は、西双版纳州生態系との関わりにおける傣族の特徴を物質文化の諸相と宗教的心性の両面から明らかにしている。物質文化においては、重層的空間利用(アクロフォレストリー)に着目し、南亜熱帯の豊かな植生相を背景に成立してきた樟・茶園、林下の藍栽培、鉄刀木薪炭林、ホームガーデンを対象に、その構造と多様な栽培及び野生植物の利用について明らかにしている。また建材、生活材、食材などに使われる多様な木材、竹、籐、香料植物と野菜に関する民族分類及びそれらの利用の諸相を詳述している。

更に生態系に対する傣族のハビトゥスの特徴づけるつつましさを、優しさを上座部仏教受容の根底にあるアニミズムと関連づけている。それを具象化する存在が龍山林であることを示し、また、2種類の神林と墓地林の尊崇が森林破壊を抑える重要な要素となっていること、さらにそれらが護林官の自発的設置や行政による林業三定政策以降の集団林(共有林)の保全的利用に結びついていることを明らかにしている。

最後に食材と食生活、住居、燃料、観賞、信仰といった村の生活要素が共有林、自留山、畑樹園地、屋敷林、畑、水田、養魚池、畜舎などの土地利用と多重の関係で結ばれている状況を環境文化の空間的展開として総括し、環境と文化の相互浸透の形を明確に提示している。

雲南西中部編では、怒江をはさんで東岸の漢族卓越地域が著しい森林消失と土地荒廃を示すのに対し、西岸の漢族、傈僳族、白族、彝族、回族、壮族、傣族などの多民族共住地域が高い森林被覆率を示す事実に着目している。怒江東岸は古くから漢族が少数民族地域へ進出した地域であり、従って本論では少数民族の環境文化と中央の政治変動に連動した漢族による環境の開発様式が対比的に描写される。

横断山脈の深い谷斜面に成立していた植生は高山部の寒温帯針葉樹林から、谷底部の亜熱帯広葉樹林まで、豊かな森林で

あった。しかし怒江東岸地域は最近、大躍進と文化大革命によって森林被覆率が10%台に激減したことを論文は明らかにしている。他方、西岸の多民族共住地域はこうした政治変動の影響が小さく、伝統的なアグロフォレストリーによる重層的土地利用が継続した。カジノキ・茶、クルミ、クリ、ミカン、ロンガンといった林園地での穀物間作が斜面の土地利用形態として確立しており、更に林間放牧によって土地利用密度を一層高めている状況が詳述されている。

斜面の森林は土壌と水源の保全上決定的に重要であるという認識から、本論は林業三定政策後の集団林の所有形態と森林の消失・保存の関係を追求し、いわゆる「共有地の悲劇」とは異なる事例がむしろ多いことを示すとともに、護林官の自発的な設置やその他森林利用に関する共同体規制の申合せが進展していることを報告している。

以上の調査と考察に基づいて、雲南の少数民族及びその生活文化に融合した漢民族に共通の特徴として森林の保全的利用やアグロフォレストリー園地での新たな森林創出の具体例を明らかにするとともに、その積極的評価をおこなっている。

雲南西中部で重要な生活要素として現れる牧畜は寒温带チベット高原区において断然明瞭な生活文化を形作っている。雲南西北部編は藏族の牧畜空間を対象に森林の保全がやはり生活文化の根幹であることを明らかにしている。

調査は迪慶州の中心、中甸盆地と周囲の移牧高山地帯で行われ、物質文化の側面から盆地の青稞麦、ソバ、ジャガイモ、カブを主体とする藏族の農業、盆地と高山地で展開される移牧と畜産物利用を詳述する。更に寒冷気候の中での人間の拠り所である家及び火塘(炉)について、その構造、材、および宗教的側面を詳述している。

そして、こうした藏族の生活を長期間安定させる上で、森林が物質的・精神的な拠り所と意識されている状況に着目し、森林被覆率の推移、大躍進と文革期の混乱、その後の集団林の保全的利用と管理体制について分析するとともに、森林保全の根底にある神山信仰を考察している。

最後に、生態環境を棲み分けた雲南の少数民族がそれぞれの環境に適応し、発達させてきた土地利用技術と生活様式の体系の研究に立って、著者は環境文化という概念を提唱している。そして、雲南省東部で進行している環境劣化をのりこえる為、少数民族の環境文化に学ぶ姿勢を強調している。

論文審査の結果の要旨

本論文は森林消失の著しい中国において、相対的に豊かな緑を保持している雲南西部を対象に生態史の観点から行った臨地調査の成果である。対象地域は寒温带チベット高原区から亜熱帯雨林西双版纳地区まで多様な生態系にわたり、その生態環境の上に多数の少数民族が棲み分け、いわゆる中華圏とは、対照的な生活景観がある。本論文はその多様な事実を分析した上で、森林の利用と保全を両立させる雲南少数民族の環境文化という切り口を提示している。

本論文は以下の諸点において独創的な調査・論考が評価できる。

1, 立論の意図が東アジア・東南アジアの諸文明に重要な位置を占める生態論理の解明を志向しており、学問的に大きな鈎脈を掘り当てている。

2, 調査結果の提示において、著者は生活文化現象を生態空間の中に絶えず位置づける手法をとり、環境と文化の相互浸透を透視する視点と手法を開拓している。この手法は調査地の生活者の鋭敏な空間感覚を反映したものであるが、地域研究に現場から投射された魅力的な方法論といえる。著者は、この手法によって、異なる生態系における多様な事象を環境文化として定位することに成功している。

3, 調査地選定において寒温带牧畜高原、暖温带焼畑斜面、亜熱帯水田盆地を抽出することで、東アジア・東南アジアの陸域生態史展開を論ずるに必要な要素を逸することなく提示している。前記3地域の調査においてとりあげている固有な生活文化は次の通りである。

①寒温带牧畜高原においては、藏族の農牧複合と森林利用体系

②暖温带焼畑斜面においては、漢族・少数民族融合社会の農牧複合とアグロフォレストリー体系

③亜熱帯水田盆地においては、豊富な植生相をふまえた傣族のアグロフォレストリーとホームガーデンの民族植物学的体系

4, 他方、少数民族の生活文化に森林保全の思想が共通要素としてあること、漢族卓越地域に比べて少数民族地域で森林破壊が抑止されている現象に着目し、森林の消失と保存を生活文化と中央の政治的変動に関連づけて追求している。その過程で、著者は生態環境に依拠した少数民族のありようが森林の保全と創出に働いていること、更に護林官、共同体規制、龍山

林、神林の伝統がこうした生活のありようと相即していることを克明的確に論証している。

5、森林の利用・保護・創出に特徴づけられた少数民族の環境文化は、漢族・少数民族融合地域においても実体的景観として成立していることを論証することによって、著者は、雲南の環境劣化を乗り越える指針が漢族主導のトップダウン的政策に求められるのではなく、漢族と少数民族の融合とりわけ少数民族文化から学ぶことにあることを明確に提示している。

以上のように、本論文は高い学術的意義を持ち、文化・地域環境学専攻東南アジア地域研究講座にふさわしい優秀な論文である。

よって本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成11年2月1日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。